

修士論文要旨  
2008年7月

小学校教師のメンタルヘルスに関する研究  
－緩衝要因としての自己効力感及び集団効力感とストレスの関係性の検討－

指導 鈴木 平 准教授

国際学研究科  
人間科学専攻  
20641525  
米山 恵美子

## 目次

1. はじめに .....	P1
(1) 学校現場の諸問題	
(2) 教師のメンタルヘルス	
(3) 教師を取り巻く環境	
(4) 自己効力感に関する研究	
(5) 集団効力感に関する研究	
2. 目的 .....	P5
3. 方法 .....	P5
4. 結果・考察 .....	P6
(1) 集団効力感尺度の因子構造の検討	
(2) 性別による比較検討	
(3) 在校年数による比較検討	
(4) 集団効力感と自己効力感の関係性	
(5) 集団効力感とコーピングの関係性	
(6) 集団効力感とストレス反応の関係性	
(7) ストレスモデルの検討	
5. 総合考察 .....	P10
6. 参考・引用文献 .....	P15
7. 資料 .....	P18

現在、学校を取り巻く環境や子どもたちの急速な変化により、教師のメンタルヘルスの悪化が問題となっている。実際に、平成 17 年度の文部科学省教育職員に関する統計調査によると、全国の学校教職員のうち、精神性疾患を原因とした休職者数は 4,178 名であり、病気休職者総数 7,017 名のおよそ 60%を占めると報告している。この結果は、在職者数に占める割合としては過去 10 年間で最大である。休職までには至らない病気欠勤者や潜在的な休職者予備群の数を想定すると、教師の精神的健康に関する問題は深刻な状況にある。

教師がストレスと上手に付き合っていくためには、生徒指導や学習指導の能力や技術に加え、同僚、管理職、保護者、地域住民との円滑な人間関係を築く能力や技術も必要である。特に、対人ストレスに曝される度合いが強い教師にとって、ストレスに対する予防的措置を図ることがメンタルヘルスを維持するためには重要である。また、学校は児童生徒の教育の場である一方、教師においては職場環境であることから、教師個人の能力に頼るだけでなく、学校組織、教師集団として、メンタルヘルスの改善を行う必要がある。

そこで本研究では、集団効力感に焦点を当て、小学校教師の集団効力感尺度の因子構造を検討し、教師のメンタルヘルスのサポートを意図した、ストレスモデルの構築を行った。

分析の結果、小学校教師版集団効力感尺度は、「組織活動・校務分掌」、「学習指導」、「生徒指導」の 3 因子構造であることが明らかになった。

また、集団効力感尺度について、性別差による比較、在校年数による比較を行った。その結果、性別による違いは認められなかったが、在校年数では現在の学校に勤務している年数が長い教師のほうが勤務年数の短い教師より、集団効力感が高いということが明らかになった。さらに、集団効力感と自己効力感、コーピング、ストレス反応の関係性において、集団効力感の「組織活動・校務分掌」、「生徒指導」の因子から自己効力感の各因子、「共感的コーピング」、「援助希求コーピング」の積極的なコーピングに正の影響がみられた。また、「回避的コーピング」、「楽観的コーピング」の消極的なコーピング、ストレス反応の各因子に負の影響がみられた。

ストレスモデルの検討では、Lazarus のトランスアクションモデル(Lazarus & Folkman, 1984)を援用し、ストレス、集団効力感、自己効力感、コーピング、ストレス反応を変数とした共分散構造分析を行った。その結果、モデルの適合度指標は、GFI=.997, AGFI=.986, CFI=1.000, NFI=.996, RMSEA=.000, AIC=26.227 であった。適合度指標は、十分な値を示しており、データへの当てはまりは非常に良いものであると判断された。具体的なモデルの経路は、ストレスからストレス反応への直接効果が最も強い影響であった。また、ストレスからコーピングを経由し、ストレス反応への間接効果、ストレスから自己効力感を経由し、ストレス反応への間接効果も有意な経路であった。さらに、ストレスから自己効力感、コーピングを経由した、ストレス反応への影響も示された。しかし、集団効力感は自己効力感への正の影響のみを示し、集団効力感からコーピング、ストレス反応への直接的な効果は見出されなかった。つまり、本研究のストレスモデルでは、集団効力感が直接的にストレスの緩衝要因となるのではなく、自己効力感を介して、コーピングへの影響を示し、ストレス反応への緩衝効果を示した。

従来の研究では、個人の効力感を指摘しており、教師個人に求められる基本的な力量が中心であった。しかし、学校という組織において、教師は個々の能力のみで職務を遂行しているわけではなく、個々の力量に加え、同僚の教師や管理職を含めた 1 つの集団として職務を遂行していることから、個人の効力感である「自己効力感」に対して、「集団効力感」は集団として学校を捉え、教師の職場におけるメンタルヘルスの改善を考える上で、重要な役割を示すものであると考えられる。

## 主要参考・引用文献

- Bandura, A. *Self-Efficacy -The exercise of control-*, New York: W. H. Freeman, 1997.
- Bandura, A. “*Exercise of Human Agency Through Collective Efficacy*,” *Current Directions in Psychological Science*, No.9, 77-80, 2000.
- 淵上克義・西村一生 「教師の協働的効力感に関する実証的研究」『教師学研究』 第 5・6 巻、1-12 2004 年.
- 淵上克義・今井奈緒・西山久子・鎌田雅史 「集団効力感に関する理論的・実証的研究 -文献展望, 学級集団効力感, 教師集団効力感作成の試み-」『岡山大学教育学部研究集録』 第 131 号、141-153 2006 年.
- 本郷由紀子 「中学生における学級の集団効力感尺度の作成と自己効力感および学校適応感の関連について」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』 第 8 号、66-72 2005 年.
- Lazarus, R.S. & Folkman, S. “*Stress, appraisal, and coping*. New York, ” *Springer, Publishing Company*, 1984.
- 松尾一絵・清水安夫 「小学校教師の職業性ストレスモデルに関する研究 -教師特有のストレス尺度及びストレス反応尺度の開発と関係性の検証-」『ストレスマネジメント研究』 現在論文投稿中
- 松尾一絵・清水安夫 「小学校教師特有のストレスコーピングに関する研究 -尺度開発と尺度モデルの検討-」『パーソナリティ研究』 Vol.16 No.3、435-437 2008 年.
- 松尾一絵・清水安夫 「小学校教師版自己効力感尺度の開発 -教師の個人属性による比較検討-」『応用教育心理学』 24 巻 1 号、11-17 2007 年.
- 中島一憲 「先生のストレス 先生のストレスとその対処法」『教育と情報』 第 503 巻、14-19 2000 年.
- 中島一憲 「教師のメンタルヘルス-その現状と課題-」『保健の科学』 第 46 巻 第 10 号、721-725 2004 年.
- 中島一憲 「【特集】教師のうつ 教師のうつ-臨床統計からみた現状と課題」『発達』106 号、2-10 2006 年.
- 坂野雄二・前田基成 編著 『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』 北大路書房、2002 年
- 嶋田洋徳 「トランスアクションナルモデル」 日本健康心理学会編 『健康心理学辞典』 実務教育出版、216-217 1997 年.
- 嶋田洋徳・坂野雄二・上里一郎 「学校ストレスモデル構築の試み」『ヒューマンサイエンスリサーチ』 Vol.4、53-68 1995 年.
- 嶋田洋徳 『小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究』 風間書房、1998 年.
- 清水安夫・米山恵美子・松尾一絵 「教師のワークストレスとストレスマネジメント」 津田彰・J.O.プロチャスカ編集 『現代のエスプリ』 至文堂、2006 年.
- 鈴木眞雄・松田惺 「中堅教員の自己効力感と燃えつき感」『愛知教育大学研究報告(教育科学編)』 第 49 巻、65-80 2000 年.
- 山内久美・小林芳郎 「小・中・高校教員の教職に対する自己認識 -教師に対する有効な学校コンサルテーションのために-」『大阪教育大学紀要第IV部門』 第 48 巻、215-232 2000 年.
- Yukl, G. *Leadership in Organizations* (6ed). Prarson Pretice Hall, 2005.